

フォードロフ思想における「復活」とキリスト論の問題

福井祐生（東京大学）

後期帝政ロシアのキリスト教思想家、ニコライ・フォードロフの思想には、キリストの復活、ラザロの復活、復活事業の三つの復活が含まれる。復活事業は、神の意志に聴従する総体としての人類が、キリストの行ない、とりわけラザロの復活を模範とし、人類の祖先の全員を霊的かつ物理的に復活させる運動の構想である。フォードロフ研究者ジョージ・ヤング（1979）は、これについて、キリストは既に人類を救ったのか、それとも人類に自己救済のための模範を示したに過ぎないのかという問題を立てた。本発表は、この問題に取り組むため、フォードロフ思想におけるキリストの復活の位置付けについて考察する。

第一に、東方キリスト教における磔刑図や復活のイコンは、人類の罪を贖い、これを復活させる者としてキリストを表象する。フォードロフにとって、キリストはそもそも復活させる者である。これに加え、ドストエフスキーの書簡中におけるルナンへの言及が、フォードロフをラザロの復活に注目する要因となった可能性がある。

第二に、フォードロフはリッチェルやトルストイに対する評価において、キリストを明確に救済論的な地平で位置付けている。フォードロフは、リッチェルの共同体論的キリスト論を批判し、復活と不死のために教会があることを指摘する。悪に対する無抵抗においてキリストを賛美したトルストイに対し、キリストの真の無抵抗は、普遍的復活事業の道筋を付けることで、死に対して生命で報いたことにあると主張する。

第三に、フォードロフ思想におけるキリスト論を「再統合」理論によって理解する。キリストの復活は、普遍的復活事業の始まりとして、人類に救済史的方向性を与えた。キリストの復活がなければ、「行って教えよ」（マタ 28:19）という能動的復活を目的とする統合の教えは生まれなかった。無力な人間を通じた復活の実現によってこそ、神の智慧の深さと豊かさが真に示される。